

人間らしさを失わなかったために

岩手文学教育学部附属中学校

三年 小山 里歩

私が少しふざける。君は笑ってる。

：君は笑ってる？

思い返せば始まりは一昨年。一二月に耳に入ってきた得体の知れないウイルスのニュース。又は、海を越えた向こうのこととで、自分達には関係がないと楽観視していた。しかし、国内でも感染者数が増加し、同じ内容のニュース

2
1
すが溢れかえっているのを見て、事態の深刻さに気付いた。不要不急の外出自粛、時短営業、酒類提供禁止、オンライン授業、時代の変化に合わせた新しい生活スタイルが求められたとともに、多くの笑顔が失われた。マスクを着用する生活は二年目に突入し、今ではあたり前に変化した。

卒業式を来月に控え、本番に向けて力を入れ始めた二月。臨時休校が知らされ、自宅でダラダラと過ごす日々が二週間経った頃には、

いても授業後すぐに「眠い」、「帰りたいたい」と口に出していた自分も、学校に行ってもそろそそろみんなと会いたいと思いつながら「ほい」とする時もある。た。会えない期間、友達とは頻繁に連絡をとっていた。直接会えなくても、連絡を取り合うことで向こう側の状況は把握できるし、通話をすれば声を聞くこともできた。それは私にとっても大きな心の支えになった。マいた。しかし、XZZのやりとりでは「同じ時を過ごしている」という感覚

はどうしても薄れてしまっている。もはや、今実際には会って話している時でもこの感覚が生きていない。それは「マスクがあるからだ。二年前、休み時間には毎日、大人数で輪になってくだらない話をして、笑い声が飛び交っていた。あたりまえだった。日常の風景が、今は「三密」に当てはまるだけなく、その人数が少なかりうが、顔がマスクで覆われているため、笑いやすさが半減しているような気がする。もしかしたら、今までエーチューブ

いても授業後すぐに「眠い」「帰りたいたい」と口に出していた自分も、学校に行っていたころみんなと会いたいと思いついて、ぼろぼろとする時もある。た。会えない期間、友達とは頻繁に連絡をとっていた。直接会えなくても、連絡を取り合うことで向こう側の状況は把握できるし、通話をすれば声を聞くこともできた。それは私にとっても大きな心の支えになった。マテいた。しかし、XZZのやりとりでは「同じ時を過ごしている」という感覚

はどうしても薄れてしまっている。もはや、今は実際に会って話している時でもこの感覚が生きていない。それは、マスクがあるからだ。二年前、休み時間には毎日、大人数で輪になってくだらない話をして、笑い声が飛び交っていた。あたりまえだった。日常の風景が、今は「三密」に当てはまるだけなく、その人数が少なかりうが、顔がマスクで覆われているため、笑いや楽しさが半減しているような気がする。もしかしたら、今までエーチューブ

で音楽しか聴いていなかったのに、自粛期間中にユーチューバーの様々な、やってみたり、ドッキリや検証の動画を見漁っていたのは、単なる暇潰しではなく、誰かの笑った顔を求めていたからなのかもしれない。動画を見て爆笑はしないかもしれないし、後に誰かと共有できる思い出話にもならないが、少しでも心が明るくなる要素が必要だった。

メッセージでやりとりするよりも、カメラを繋いで顔を見互えりも、同じ空間でその感情を共有して生まれた笑顔は、それらと比べられないほど尊く、かけがえのないものなんだと知った。

情報通信技術がさらなる発展を遂げ、世界中どこにいても誰とでも簡単に、すぐに繋がれる世界がくるのは、そう遠い未来の話ではない。それによつて、不安が安心に変わった。命が救われることだ。アあるかもしれない。きっと私たちの人生を豊かにしてくれるものになるだろう。

しかし、技術が発展してもアナログ的な人との繋がりを決してなくしてはいけない。これは、ここ二年間の世界の変化で私が学んだことのひとつでもある。字面だけでは、その情報が真か偽か、相手は今のどのような気持ちなのか、笑っているのか泣いているのかまでは読み取ることはできない。アナログ的な関わりがあり、初めて偽りのない人物像が見えてきたり、その人の考えていることが伝わってくる。そういって段階を踏むことで本当の信

頼関係も築かれていくのだ。今やSNSやアプリで出会った人と関係が進展することもある時代だ。出会うはずのなか、た人と出会えることはとても素敵なことである。それでも、ネット上の人物像は自分の想像に過ぎず、実際のものとはかけ離れている可能性もないとは言えない。写真で見る景色と実際の景色を見て感じるものが異なるように、インターネットと現実では何らかのズレが生じてしまう。だから、インターネットがどこまで普及して

も、アナログ的な繋がりには切り離してはいけ
ない。私は考える。アないと、人間らしさが
失われてしまいう気がする。

来年の三月、人生に一度きりの、中学卒業
の門出の場があるなら、同じクラスのある三五人
のとびっまりの笑顔を、この二年間を埋める
くらい目に焼き付けたい。それができなくて
も、いつかまた全員で集まっ、懐かしい話
をきって、この二年間のことを笑い飛ばしたい。
いつかの日のために、私は今日もマヌクを

つりる。